
冬の花火

kick

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冬の花火

【Nコード】

N4588B

【作者名】

kick

【あらすじ】

男と女の友情はありえるっていうけど、私はやっぱりあいつのこ
とを好きなんだ。いえないけど。そんな彼女のちょっとした幸せ。

今日もなんだか体調が悪い。

「健康だ！」と思える日は年に10日もないと思う。

タバコの吸い過ぎか、連日の深酒か、運動不足か、原因はいろいろ考えられるけど、私とつるんで遊んでいるあいつは、私とまったく同じことをしているはずなのに、今日も元気に電話をかけてくる。たまには休ませてくれ、って思う。

でも思っただけでもあいつの「遊び行こうぜ！」って声を聞くと「おう。何時？」って答えてしまう。

きっと私があいつのことが好きなんだと思う。

でも認めない。あいつも私のことが好きだけど、それは甘い感情ではなくて、熱い友情だ。

「今日は花火をしよう！」

とあいつは言った。

押入れを開けたら開封していない花火セットがでてきたらしい。

真冬の公園でビニールを破った。

タバコの火を手持ち花火の先っぽについでるへろへろの紙につけた。

シュボー！

一瞬大きな音と煙をたてたけれど、すぐに火力は弱くなり、へなへなと火は消えてしまった。

「しけってんじゃないの？」

私が言う。

「あきらめ早えよ。全部試そう。」

そういつてあいつは次々に火をつけていく。

いくつかは搾り出すように火花を飛ばしたけれど、そのほとんどが期待する明るさも熱も出さなかった。

「ま、いつか。こんなもんだよ。飲みにでもいこうよ。」
私と言う。

あいつはタバコに火をつけて

「ま、いつか。」

と言う。

「夏になったらまた新しいの買って、今度はものすごい勢いのやろう。打ち上げ花火を手で持ってさ。」

「ばーかばーか。また危ないこと言うて。」

「お前花火嫌い？」

「嫌いじゃないけど、なんかあんたと一緒にやると火の粉とか振り掛けられそう。」

「あははは。ま、やるな。」

「ほらー、ま、いいよ。寒いからさ、どっか入って飲もう。」
そういつて二人は歩き出す。

「おまえさ、夏、暇？」

「なにそれアバウトな質問だなあ。」

「夏、花火しようぜ。」

「ん？そうだね。」

二人はてくてく歩く。

そっか。夏も花火するのか。また二人でかな。

いかん。笑みをかみ殺さなければ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4588b/>

冬の花火

2010年11月17日14時57分発行